

競技歴が数年の団塊世代の選手でも、ひよっとしたら五輪に出場できるかもしれない……。そんな夢を抱かせる超マイナーなスポーツに、主に首都圏に住む人たちがはまっている。彼らの心をとらえたのは、英国が本場でゲートボールの原型となった「アソシエーション・クロッカー（AC）」。

競技人口が少なくトップ争いが激しくないのも魅力。「将来、五輪の正式種目になるのでは」と期待しながら練習に励む。

（四倉幹木）

## 英国本場の競技「クロッカー」

# 中高年、五輪出場の夢

## 数年でトップ選手にも

立川市の国営昭和記念公園。週末になると白いウェアの男性たちが、柄の長い木づちのような「マレット」を手に芝生の上を歩き回る。

英国で発達したACはシングルスとダブルスがあり、2個ずつのボールをマレットで打ち、先に六つのフープ（ゲート）に通して中央のボールにぶつけた方が勝つ。相手

の球を不利な位置にはじき飛ばしたり、相手のじやまになる所へ自球を転がしたりする頭脳プレーで「芝生上のビリヤード」とも呼ばれる。

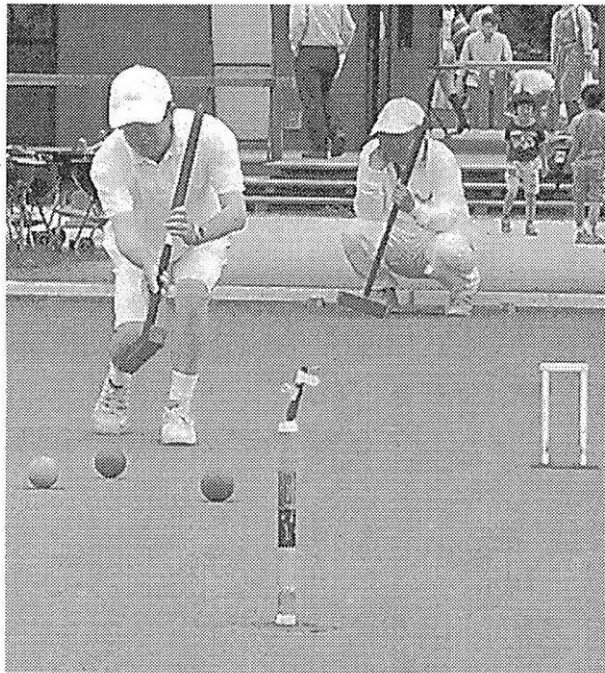
日本クロッカー協会が設立され、国内で本格的に始まったのは83年。だが、25・6×32サイズの専用コートが同公園にしかないために会員は約20人とどまり、大半は首都圏

に住む人たちだ。「始めたばかりでもトップ選手になれる可能性が十分ある」。02年にACを始め、昨年、日本チャンピオンになった国分寺市の建設コンサルタン

ト押田悟さん(48)はACの魅力を語る。もとはサーファー。老後も夫婦で楽しめるスポーツを探していた。テレビ番組で「五輪選手にな

る方法」の一つとしてACを紹介されたのを見て同公園を訪れ、横浜市に住む当時のチャンピオン

の山田正明さん(61)の手ほどきを受けた。「野球を始めた日に長嶋監督にレッスンを受けるようなもの。感動しました」。わずか4年で国内のトップ選手になり、来年の世界選手権出場を目指している。



「アソシエーション・クロッカー」のプレー。白いフープ（右）はゲートボールのゲートよりかなり狭い＝立川市の昭和記念公園で

同協会によると、ACの正式な競技団体は英、米、豪、カナダなど27カ国にあるがアジアでは日本だけ。1900年のパリ五輪で披露されたこと

もあり、英国では2012年のロンドン五輪に正式種目への登録を望む声が根強いという。高齢者でも無理なく楽しめるため、会員の平均年齢は50代半ば。横浜市

の建築士で事務局長の森山孝治さん(48)は「団塊世代が始めても五輪に間に合うかも。土、日

には昭和記念公園のクロッカーコートで会員がプレーしているの、だれでも気軽に声をかけてほしい」と呼びかけている。

## 村上隆さんら

### ロハスの催し

きょう・あす新宿御苑アーツイストの村上隆さんや音楽家の坂本龍一さんらが、ロハス（健康で持続可能なライフスタイル）に関するトークイベントを新宿御苑（新宿区）で開く。19日に村上さん、20日には坂本さんが登場する。

12日から開催中の「第2回ロハスデザイン大賞2007・新宿御苑展」の一環。ロハスに関する活動を推進する「ロハスクラブ」(中央区築地7丁目)と環境省が共催している。会場では、ロハスを体現している個人や企業、商品の中から大賞を選ぶ投票もできる。入場料(大人200円、小・中学生50円)が必要。20日まで開催。問い合わせは同大賞事務局(03・3524・9757)へ。

問い合わせは同事務局(045・563・9855)へ。